

December 14, 2025

喜びの神

ルカ 2:15-17

2:15 御使いたちが彼らから離れて天に帰ったとき、羊飼いたちは話し合った。「さあ、ベツレヘムまで行って、主が私たちに知らせてくださったこの出来事を見届けて来よう。」

2:16 そして急いで行って、マリアとヨセフと、飼葉桶に寝ているみどりごを捜し当てた。

2:17 それをして羊飼いたちは、この幼子について自分たちに告げられたことを知らせた。

「もろびとござりて」（新聖歌 76）、「久しく待ちにし」（新聖歌 68）、「いざみたみよ」（聖歌 131）には、日本語には訳されていませんが、Joy や Rejoice という言葉が歌詞に使われています。“The Great Our Joy” というクリスマス・キャロルでは、一組が “Joy, Joy, Joy” と歌うと、もう一組が “Joy, Joy, Joy” とエコーを返して歌います。クリスマスと喜び、それは切っても切り離せません。なぜでしょうか。それは、喜びの神が、クリスマスに人となって、世においてになったからです。

一、人を喜ぶ神

神は、喜びの神です。神は、決して不機嫌なお方、気難しいお方、悲観的なお方ではありません。神のお心の中には喜びが満ちています。神は何事をなさるにも喜びをもってなさるのです。そのことは、聖書のはじめから書かれています。神がこの地球を人の住処として創造されたとき、水で覆われていた地球に陸地を造られました。創世記 1:10 に「神は乾いた所を地と名

づけ、水の集まった所を海と名づけられた。神はそれを良しと見られた」とあります。同じように陸地に木や草を生えさせたときも「神はそれを良しと見られた」（同 12 節）と言われました。太陽・月・星についても「神はそれを良しと見られた」（同 18 節）、空の鳥、海の生き物、地上の生き物についても「神はそれを良しと見られた」（同 21、25 節）と言われました。神がご自分の造られたものを喜んでおられる様子が分かります。神は最後に人を創造され、創造のみわざを終えられました。聖書はこう言っています。「神はご自分が造ったすべてのものを見られた。見よ、それは非常に良かった。」（同 31 節）神は、すべてのものを喜びをもって造られ、造られたものを喜ばれましたが、とりわけ、人を何にもまさる喜びとされました。世界のあらゆるものは、神が人のために、人を喜ばせるために造られたといつてもよいのです。

しかし、人は罪を犯して神に喜ばれない者となってしまいました。けれども神は、人がそのまま滅びていくことを望まれませんでした。神は救いを用意され、救い主を遣わすと約束されました。罪ある人々に、悔い改めて神に立ち返り、救いを受けよと呼びかけられたのです。エゼキエル 18:23 にこうあります。「わたしは悪しき者の死を喜ぶだろうか——神である主のことば——。彼がその生き方から立ち返って生きることを喜ばないだろうか。」神が一番喜んでくださること、それは、私たちが悔い改めて神に立ち返って救われることです。

神が私たちの救いを願い、悔い改める者を喜んでくださることは、放蕩息子のたとえに見事に描かれています。それは、こんな話です。ある裕福な人に二人の息子がありました。弟息子が、田舎暮らしに飽きあきして、都会に、しかも外国に行くこ

とを決心しました。それで、父親に相続を要求しました。「生前贈与」というものです。ユダヤでは、長男は、他の息子の倍を相続すると定められていましたので、この弟息子は父親の財産の三分の一を受け取ったことになります。

三分の一とはいえ、それは生涯困らずに生活できるものでした。事業をして、何倍にも殖やせたでしょう。ところが、この弟息子はそれを遊興のために湯水のように使い果たしてしまったのです。「放蕩」の「蕩」という漢字に「湯」が入っているのはそのためかもしれません。弟息子が親からもらったものを無駄にしてしまった姿は、神から受けている才能や健康、環境や機会などを生かすことがないばかりか、それらを無駄にしてしまい、人生の破綻を経験している人々の姿に重なります。

弟息子は落ちぶれて養豚業者のもとでぶたに餌をやる仕事をさせられました。ぶたの餌さえ食べたいと思うほど飢えたとき、彼は我に返り、自分の愚かさを認め、悔い改め、そこから立ち上がって父のもとに歩き出したのです。

父親はといえば、息子がいつ帰ってくるだろうかと、外に出でては遠くの道をながめる毎日でした。ある日、ぼろぼろの着物を着て、はだしでとぼとぼと歩いてくる人を見かけました。誰もそれが、あの弟息子だと見分けられない姿でした。しかし、父親は一目でそれが自分の息子だと分かりました。そして、自分のほうから駆け出して息子を抱きしめたのです。当時の社会では、このような息子が帰ってきたら、父親は決して自分から迎えることなどしません。家の中にさえ入れません。自分の前にひざまずかせて、「何しに帰ってきたのだ」と叱り飛ばし、刑罰を与えるのが普通でした。ところが、この父親は、自分の方から走り寄って息子を迎えたのです。

マルチン・ルターは、このことを説明してこう言っています。「昔、裕福な人は裾の長い服を着ていて、ゆったりと体を動かした。どんなことがあっても走ることなどなかった。ところが、この父親は両手ですそをたくしあげて、全速力で走り出した。ここに罪びとに対する神の愛が表れている。」この父親は、父なる神を表わしています。父親が弟息子に晴れ着を着せ、履物をはかせ、指輪をつけさせたのは、この放蕩息子を再び息子として受け入れたことを意味しています。ご馳走をつくらせパーティを開いたことは、弟息子を取り戻した父親の喜びを表わしています。同じように神は、ご自分のもとに返ってくるものをご自分の子どもとして迎え入れ、そのことを大喜びなさるのです。イエスが「一人の罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人のためよりも、大きな喜びが天にあるのです」（ルカ 15:7）と言われた通りです。

二、神を喜ぶ人

私たちの悔い改めを喜んでくださる神は、悔い改めた者が確実に救われるために、救い主を備えてくださり、救い主が一人の人として世にお生まれになることを聖書に預言しておられました。そして、その救い主がお生まれになるのです。ですから、神は私たちに「喜べ」と言われ、私たちも「喜びのキャンドル」を灯し、クリスマスを祝うのです。

神の「喜べ」との言葉は、まず、イエスの母となるマリアに告げられました。御使いはマリアに「おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます」（ルカ 1:28）と告げましたが、「おめでとう」は、もとの言葉では「喜べ」です。「見よ、処女が身ごもっている。そして男の子を産み、その名をイ

ンマヌエルと呼ぶ。」（イザヤ7:14）この預言が成就する時が来たからです。救い主をみごもったマリアが、バプテスマのヨハネを宿していたエリサベツを訪問したとき、エリサベツは胎児が動くのを感じて、「あなたのがいさつの声が私の耳に入った、ちょうどそのとき、私の胎内で子どもが喜んで躍りました」（ルカ1:44）と言っています。

そして、救い主がお生まれになったとき、御使いは羊飼いたちに言いました。「恐れることはありません。見なさい。私は、この民全体に与えられる、大きな喜びを告げ知らせます。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。」（ルカ2:10-11）救い主の誕生は「大きな喜び」です。家畜小屋の飼葉桶に寝かせられた救い主を礼拝した羊飼いたちは、喜びに満たされ、「神をあがめ、賛美しながら帰って行」きました（同20節）。救い主が来られ、その救い主を礼拝できたからです。この赤ん坊がこれからどんなふうに暮らし、大人になってどんなことをするのか、羊飼いたちには何一つ知らされませんでしたが、羊飼いたちは、この救い主が、この世の中の地位や財産のあるもの、権力や学識のある者たちのためだけの救い主ではなく、自分たちをも含む、すべての人の救い主であることを知りました。もしイエスが宮殿で生まれ、黄金のゆりかごに寝かせられていたら、羊飼いたちはそこに近づくことさえできなかつたでしょう。家畜小屋の飼葉桶だからこそ、羊飼いは救い主に出会えたのです。家畜小屋は、羊飼いにとっては自分たちの領域です。羊飼いたちは、救い主が自分たちのために、自分たちのところに来られたことを知って、イエスを自分たちのための救い主として喜び、神を賛美したのです。

C. S. ルイスは、「神の御子が人となられたのは、人が神の子どもになるためである」と言いました。神の御子は、私たちを救うため、高い天からくだり、人となられました。イエスは、貧しく、低い生活に甘んじられただけでなく、罪を着せられ十字架につけられ、死にまでも追いやられました。天から地へ、地から死者の世界にまでくだられたのです。しかし、十字架から三日目にイエスは復活され、それから四十日して、再び、天に帰られました。それは、十字架で私たちの罪を背負って、私たちに代わって罪の償いをし、復活によって、罪のうちに死んでいた私たちを生かし、私たちを天に迎えるためでした。C. S. ルイスが言いたかったのは、クリスマスは、たんなる季節のお祝い、楽しみではなく、イエスの誕生によって、イエスを信じる者もまた神の子どもとして新しく生まれることができるようになったことを喜ぶときでもあるということなのです。赤ちゃんの誕生を祝わない人はありません。アメリカでは子どもだけでなく何歳になっても誕生日を祝います。クリスマスに、私たちは、イエスの誕生と、私たちの神の子どもとしての誕生をともに祝うのです。

この世には、さまざまな「楽しみ」があります。しかし、そのすべてが「喜び」になるとは限りません。コメディアンは「笑い」を売ることはできます。しかし、「喜び」を売ることはできません。人生には、おいしいものを食べたり、きれいな景色や町並みを見るなどの「楽しみ」があります。友だちと冗談を言い合い、おなかをかかえて大笑いするようなことも必要でしょう。しかし、それらは一時的なもので、人を生かす力にはなりません。

しかし、神がくださる喜び、イエス・キリストを信じること

によって与えられる喜びは、状況によって簡単になくなるものではありません。パウロとシラスが鞭で打たれたうえ、手かせ、足かせをかけられ牢屋に放り込まれました。しかし、消えない心の喜びによって贊美を歌いました。そのような喜びが苦しみの中でも人を支え、力づけるのです。この喜びは、私たちが毎日の義務を、いやいやながらでなく、心を込めて果たす力となります。聖書が、「主を喜ぶことは、あなたがたの力だ」（ネヘミヤ 8:10）と言う通りです。詩篇 37:4 には、「主を自らの喜びとせよ。／主はあなたの心の願いをかなえてくださる」とあります。これに対して、私たちはこう答えましょう。詩篇 104:34 です。「私の心の思いが みこころにかないますように。／私は 主を喜びます。」神に喜ばれ、神を喜ぶ。ここに人生の原動力があります。このクリスマスに、神からのギフトである「喜び」を受け取り、それを、より一層確かなものにしたいと思います。

（祈り）

父なる神さま、あなたは、喜びの神です。きょう、「喜びのキャンドル」を灯しながら、私たちは、あなたが私たちを喜んでくださり、私たちもあなたを喜ぶことができるために、イエス・キリストがお生まれになったことを知りました。この喜びをまだ知らない人たちが、それを知り、イエスを救い主として人生に迎え入れ、あなたからの喜びによって力づけられて日々を歩むことができるよう導いてください。私たちの救い主イエス・キリストのお名前によって祈ります。